

村越真のオリエンテーリング日誌

Fast life, slow life

9月に引き続き、「営業」「PR」の月間。その合間を縫って、久しぶりのオリエンテーリング。悔いの残るレースは、次のレースへのモチベーションを高めてくれる。

10月2日

里山アドベンチャーの楽しかった代償は疲労という形でやってきた。午後から朝霧高原にでかけて、野外活動センターの指定管理者選定委員会に出席しなければならぬのに、あまりの疲労感で車を運転する気になれなかった。石原に朝霧高原まで送ってもらい、帰りは県庁の人の車で帰ってきた。行きも帰りもほとんど車の中で熟睡していた。眠気は感じていなかったが、身体が睡眠を欲していたのだろう。

10月7日

大学に出かけて軽くメールチェックをした後、午後、3時間かけてマウンテンバイク+ランで、21日の日本平ロゲインの下見に出かけた。昨年12月に飯能でやった「フォト・ロゲイン」形式なので、事前に写真を撮っておけば、当日の準備は何も要らない。富士山が見える数々の展望ポイント、古墳や旧跡など、知らなかった日本平の魅力を再発見した。

10月8日

朝からいい天気だった。山岳耐久レース日和である。昨年デッドヒートを繰り広げた鍋木さんと横山さんが出場する他、トレイルランの貴公子石川弘樹さんも出場する。一度は走ってみたいと思っているレースだ。その下見と、多くのオリエンティアの応援を兼ねてレース見物に出かけた。

朝のんびり起きたので、時刻は10時近くになっている。今から家を出たのではスタートには間に合わない。夕刻以降に奥多摩から入って大ダワ峠で応援し、そのまま一緒に走って帰ってくることも考えたが、せっかくなのでいい天気なのだから、昼間にも観戦したい。八王子から青梅線方面に入っている間は間に合わない。八王子から高尾に出て、そこから中央線に乗り、コースのある尾根を南から入るといったアイデアを思いついた。上野原からタクシーで登山道入り口までいけば、十分間に合う。

上野原に着くと、都合のいいことに駅前にバスが待っていた。行く先を確認すると、



東日本大会ゴールにて(上林弘敏さん撮影)。珍しくかっこよく撮れた。

登山道の入り口を經由している。木楽原までバスに乗り、そこから3 kmほどの登山道を直登する。登り切ったところにある第一関門の浅間峠には、すでに役員が2 - 30人は待機しており、見学者と思しき人たちもいる。反対側の登山道からは、スイーパー役の人もあがってきていた。最後尾を走るスイーパーの出番まではまだ4時間以上あるが、トップが見たくてこのタイミングであがってきたのだという。熱意あるスタッフに恵まれてこそ、イベントが成り立つのだ。

トップ通過まで時間があるので、生贖(しょうとく)山までコースを逆行した。気持ちのよい尾根道を、所々見える景色を楽しみながら、三国峠までやってきた。トップ通過まであと10分少々。ここでトップを待つことにした。

独走でやって来た選手は韓国の人だと後で知ったので、その時は上位を占めるであろう顔見知りの選手のいずれでもないことにびっくりし、「え、前走?」とも思ったりした。それから3分して、石川さん、その後10分近くしてから、鍋木さんが集団の中で

やってきた。いつもの切れが感じられない。アドベンチャーレースやトレイルランニングレースの時会った人、オリエンティア等、知った顔が続々通過する。応援を頼まれた利佳ちゃん came たので、浅間峠まで伴走する。予定ではそこで別れて車道に下って、ショートカットすれば、トップが大岳山を通過するのを見るはずだった。しかし、利佳ちゃんの到着が予定よりやや遅く、大岳でトップに追いつくのは厳しそうだ。

いそいで車道に降り、車道を12kmほど走って登山道入り口に向かう。途中の集落で給水と給食。日も暮れてきたので、ヘッドランプを点けて進む。登山地図のコースタイムを見ると、その半分を切るペースでないとトップ通過予定には間に合わない。かなり疲れてきてきたし、大岳までの登山道は標高差800mほどをほぼ直登するルートで傾斜もきつい。久しぶりに経験する筋肉疲労に泣きそうになりながら、なんとか予定の18時30分に大岳に到着した。例年のタイムなら、トップが見られるはずだ。

4年前に本の取材で世話になった大岳山荘の小屋番に挨拶し、あとは、大岳神社の階段の下で、寝袋をかぶって選手を待っていた。最初の選手が来たのは、それから15分近くたってからだ。トップだと思ったのは間違いで、3位を走る横山さんだった。僕が着く直前にトップの韓国選手と鍋木さんは通過してしまっていたようだ。その後4時間、およそ200位くらいまでを応援した。全くの間の中に突然朗声がかいて「がんばれ!」と応援されるのだから、選手の方もびっくりしたに違いない。選手は三々五々通過して、数分間誰もこない時間帯が生じる。選手がとぎれた時には、寝袋にくるまって横になり、梢の間から見える星と満月に近い月を見ていた。時間を気にせず星空を眺めるなんて、この場所に来なければありえなかっただろう。

フィニッシュにたどりついた時にはもう2時を過ぎていた。利佳ちゃんのゴール直後に杉山さんもゴールしてきた。トップは韓国の選手で、途中20分近く差を付けられていた鍋木さんは、1分まで迫ったが、逆転はできなかったようだ。昨年のタイムもすごかったが、今年の優勝タイムは7時間間に縮まった。

3:30から会場の体育館で仮眠して、7時に起きて墓参りに出かけた。1年以上放置された祖父たちの墓地は、枯れ葉に覆われていて、掃除に1時間以上かかった。現世に何の利益ももたらさない墓参りは、究極のスローライフだ。

10月13日

夏に偶然に西の家で会った石川綾は、静岡県立大学で博士課程に在学している。論文指導のために静岡に来るといのでデー

トをした。何年もつきあいがあのに、ゆっくり話をするのは初めてだった。彼女は栄養学を専攻しているので、スポーツ選手の栄養補給や水分摂取の話題で話が弾む。

10月14日

朝霧野外活動センターで、ミニオリエンテーリングの講習会を主催。10人ほどの講習生に対して子ども向けのミニオリエンテーリング実習を行なった。参加申し込みが少なかつたので、やや強引に誘ったキャンプカウンセラー協会所属の学生さんも、「こんな面白いとは思わなかつた」と、楽しんでくれた。キャンプを専門的にやっている活動者ですら、現在のオリエンテーリングの状況はほとんど知らない。私たちにまだまだPRが足りないのだ。

10月15日

自転車で行った日本平ロゲインの写真撮影の残りを仕上げた後、大学で軽く仕事をして、島田に出かけた。石原の所属するジャズサークルがリサイタルを開くのだという。プロの歌手もゲスト出演していたので、聴き応えがあった。

イベントを見ると、「裏方は何人だろう」「このパンフレットの印刷費がいくら、会場使用料がいくら、収支は合っているのだろうか」といった、運営面について目がいってしまう。

10月16日

午前中、大学で用事を済ませた後、午後一に八王子でGIS関係の研究会に出席。その後夕方から森永製菓が運営する財団で、オリエンテーリングとアウトドアスポーツの意義について講話した。大学院時代に世話になったレジャー論の教授が顧問を務めている関係で呼ばれたようだ。

当時、一緒に報告書作成などの仕事を楽しんだ須賀さんという女性から連絡が来た。また彼女と仕事ができることが嬉しくて、まだ精神的にかなり低空飛行だった8月に依頼されたのだが、引き受けてしまった。まだ社会的に未熟だった時ではあったが、「この人は信頼して一緒に仕事ができる」と目した人が、20年を経て、地道にキャリアを積み重ねているのを見るのは嬉しい。研究会自体は和やかで、参加者の質問は的を射て、かえって刺激を受けた。楽しかったが、午前中からのタイトなスケジュールで、やや疲れ気味。

10月18日

前日からの精神的疲労を引きずり、久しぶりに気分障害がでる。もともと精神的にも身体的にも興奮しやすいたちの僕は、楽しいことでも、自律神経が乱れて、不調感に陥ってしまう。夜、気持ちを追い込まない程度にあえてジョグをしてみた。思いの外気持ちよく終えられた。身体の動きづくりは今でもできる。いや、速く走れない今

だからこそできることではないか。その結果として新しい目標を得ることができるかもしれない。一瞬、2010年のノルウェーが見えてしまった。

10月21日

一度はやりたいと思っていた日本平でのロゲインを、静大OLCと静岡OLCの合同行事として開催した。OBメールにも流したところ、学生25名、OB・その家族合わせて50名以上が集まる一大イベントになってしまった。おまけに、前の週にロゲインの世界選手権に出場した「ロゲインの帝王柳下大までやってくる始末だ。

朝早くに目覚めたせいか、興奮気味で頭重感が続く一日だったが、役員として給水をする傍ら、自分も走ってみた。日本平の魅力が再発見し、思わず来年に向けて新たなエリアの調査をしていた。



日本平ロゲインを楽しむ筆者や学生たち(上)となぜか現れた帝王柳下。ポイントにはフラッグはなく、行った証拠にその場所の写真を撮ってくる。

10月22日

久しぶりに家で落ち着ける週末。午前中は来週のAPOCコントロールリングのためのチェックリストを作成し、その後半年がかりで書いた英語の論文の推敲をして、やや疲れ気味。夕方、自転車とランで日本平に出かけて、山中の連絡路探し。来年の下見。

10月28日

中部国際空港より、APOCの準備のため香港へ移動。空港でKKと落ち合っ、そのままリレーとスプリントのトレイルへ向かう。KKやLL奴なんだが、スタンスが甘い。リレーのコースはやや心配だ。夕方には、香港協会会長のCKと元会長のアリバートと一緒に夕食を取りながら、これからのアジ

アの発展について話し合う。

翌29日は、フェリーでランタオ島に渡り、ミドルとロングのテレインをチェックした。12月でも寒くなかったから、10月でも寒いことはないのだろうというくらいの漠然とした意識で出かけた。天気が良いので日本の9月上旬の残暑のような暑さだった。十分水分を用意したつもりだったが、家が近くにあるアルバートが飲み物を持ってきてくれなかったら、最後は脱水症状になっていたかもしれない。

テレインチェックに同行してくれたユアが、どこか見たいところはないかと帰りかけに言うので、「スポーツショップに言って、イノベイトのトレイルランニングシューズが買いたい」という。この靴は室内に紹介されて是非ほしかった靴だが、日本では買える店が限られている。イギリスのメーカーなので、香港ならあるだろうと聞いてみたのだ。彼がパトリックに電話すると、パトリックはちゃんと店を知っていた。靴はあったが、残念ながらサイズがなかった。その後、パトリックに会うと、「暮れにはまた入荷するよ」と教えてくれた。

翌日は月曜日だったが、朝から各コースプランナーとミーティングを持った。僕はたまたまこの週末を選んだのだが、日本での彼岸に相当するような祝日だったらいい。半日打ち合わせをして、帰国の途に着く。

11月2日

今年で3年目の建設大学校での授業。国土地理院の係長クラスが受講する研修の最後に、「利用者側の視点で見た地図という位置づけで、道迷いと地図の話をしている。講演に呼んでくれた研修官の人が、「地理院ももっと利用者のことを考えたサービスをするようになるといいんですけど」という。そう思う少数の人がいても、なかなか組織というのは動かないようだ。

11月4日

全日本リレーのため神戸へ。開会式会場で、普及教育委員会の打ち合わせをした後、静岡県選手と合流し、宿舎へ。

その直後に倒れて、それ以降スローライフを余儀なくされたのが、昨年の全日本リレーだった。それから約1年経ってしまった。スローにしないとだめなのか、スローだから調子がでないのか。今もって結論が出せない。

昨年は走っていても気を失うような不快感があったのにトップタイム。今年はディテールに富んだ地形で密かに期待していたが、MEで順位を上げ、最終的に6位になったものの、自分の生タイムで見ると8位。トップの37分とは3分半も差がある。生の順位で利佳ちゃんと賭けていたので、神戸牛をゲットされてしまう。ナビゲーションも精彩を欠いていた。

11月6日

読図問題本の打ち合わせと図版づくりのために、宮内が来た。僕が同書の序章で「読図問題は知的興奮を誘う」と書いたのを「興奮ですか？私はしませんけど」と茶化していた彼女だが、問題を作る彼女はとっても楽しそうだった。その後、この本のモニターをオリエンティアとアドベンチャーレーサーのメーリングリストで募集したら、あっという間に20名以上の応募があった。「知的興奮を味わえる」本ができると思うのだけれどな。

11月11日

朝ゆっくりとつくばに出かけ、1時からスキー0の世界選手権準備委員会を開催する。夕方は堀出とデートの予定だったが、東日本のドーピング検査のために来た片岡も交えて3人で食事。デートも楽しいが、趣味を微妙に交錯させる3人の食事も楽しい。アウトドアスポーツの話題からオリエンティアの話題まで、話は尽きない。

11月12日

東日本大会。トップと6分差というタイム差もショックと言えばショックだが、それ以上にショックだったのは、久しぶりに使った1:15000が全然読めなかったことだ。小縮尺の地図がみづらくなり始めていることには気づいていたが、部屋の中では支障なく読める。しかし、山でのレースとなると全く条件が違うのだ。暗さと走りながらという二重の負担で、前半はレースをやめようかと思うくらい地図が読めなかった。走り負けたのではなく、ナビゲーションで負けたことに悔しさがわき起こる。

フィニッシュ後、いきなり一人の腕章を着けた若者が現れ「日本アンチドーピング機構の者です。ドーピングを実施しますので、今から1時間以内に受け付けをすませてください」と告げた。なんだか、突然家宅捜索に刑事が現れるような感じだ。くじ引きでドーピングに当たったのだ。おしっこが出て解放されるまで怪しい行動がないかどうかを確認するためにシャペロンと呼ばれる係員が着く。近くで着替えていた利佳ちゃんが、「私、風邪気味だったのに、菓飲まなかったんだよ（多くの総合感冒薬にはドーピングにひっかかるエフェドリンという薬物が含まれている）私、検査されたいな」とうらやましがった。

11月17日

午後からJOAに出かけて、総務会。その後大阪に移動する。枚方市の野外活動センターで、翌日からミニオリエンタリングの講習会があるのだ。18日土曜日は、センターの大学生ボランティアに対して、ミニオリエンタリングの実施方法のレクチャーと実体験。彼らの多くが、オリエンタリングってつまらないと思っていたが、

こういうやり方なら子どもも楽しめる、率直な感想を漏らした。少しづつでも、オリエンタリングに対して理解を持つ野外活動者が育つことを期待したい。

翌19日は、小学生の子どもを対象にミニ・オリエンタリングを実施した。天候が悪かったので、昨日即興で作った屋内の地図でのオリエンタリング。これは一度はやってみたかったものだ。参加者のほとんどを占める1年生から4年生にはちょうどよく、宝物探しみたいで、楽しかったようだ。

その後は外に出て1:1000でのミニ・オリエンタリング。1年生には地図を見て正確に判断するのは難しかったが、所々でヒントを与えてやると、自分でフラッグを見つけて、喜んで走っていった。小学校低学年でも、場所とポイント位置さえうまく設定してやれば、十分楽しめるのだと分かったことは収穫だった。少し動き回ればフラッグが見えるくらいでちょうどいい。



枚方市野外活動センターで。屋内でのゲーム（上）と屋外でのミニオリエンタリングを楽しむ小学生

（村越 真）